エリート女スパイ
〜完全敗北ミッション〜

あさぎりりょうこ
裏社会で一目置かれるエリート女スパイ「朝霧涼子」
今回もとある組織を壊滅させるため敵地に乗り込む！

アジトに侵入するも見張りに見つかってしまい…

「ケたくなければ大人しくしろ」
「わたわ・・だから撃たないで」
「おっ侵入者だぞ！こっちにこい」
すぐ先ほど警備していた男たちをこちらに集める。

「こうする？」
「とりあえず牢屋に入れとくか？」
「ボスに。その前にボスに報告だ」
彼ってここで捕まってしまうのは不都合。
（まずいわね・・）

男たちの性処理道具に！？

敵のボスに「負けた方は奴隷」という条件で戦いをするも…

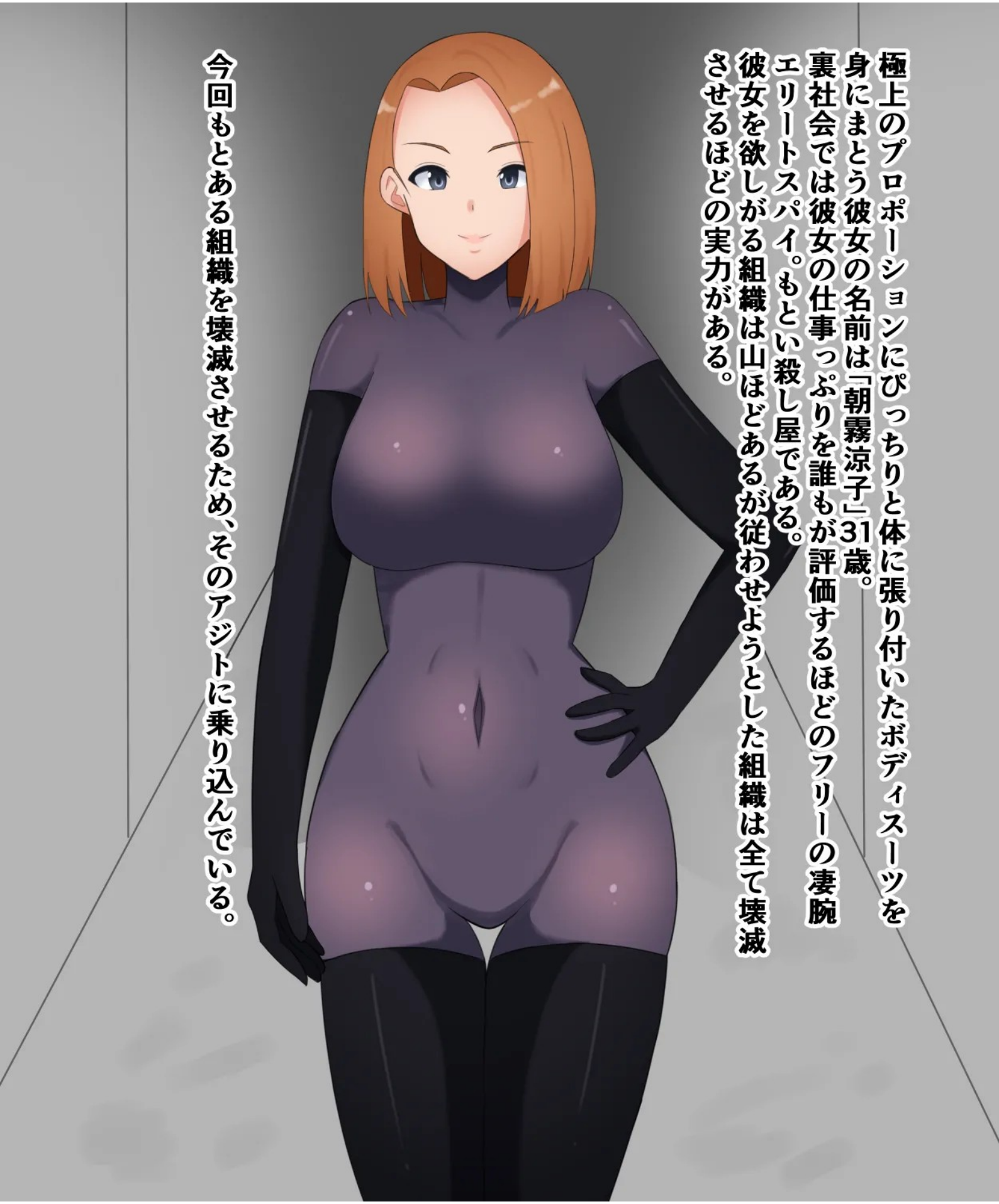
かしその攻撃もいとも簡単にかわされてしまう。
よた避けられた!!
は再び女スパイの股間を弄り今度はお尻をがっしり掴む。
めっ…やめ…!
戦闘で鍛えられた良い尻だねぇ。弾力があってりご心地がいい
がしっ!
くっ…

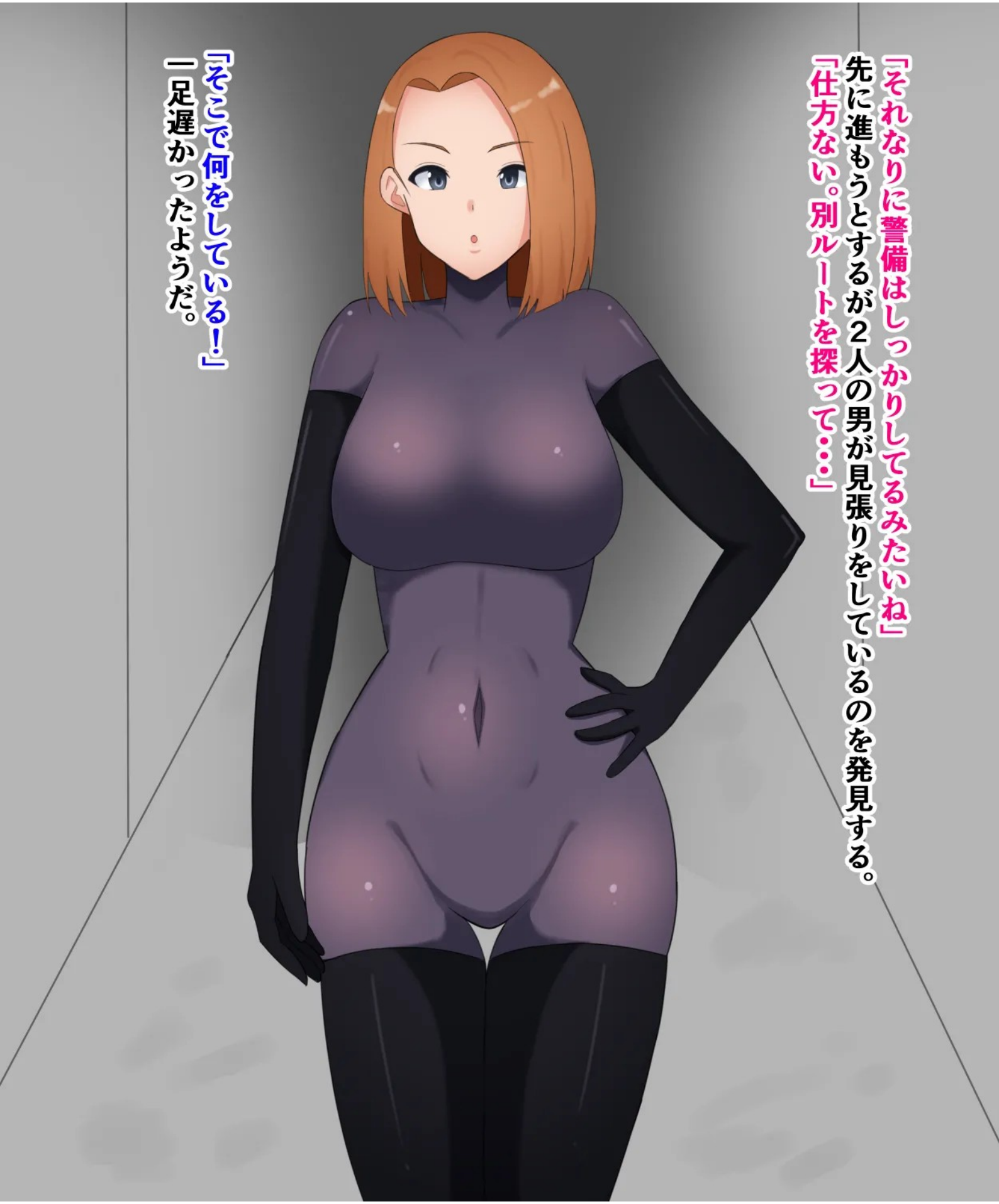
勝敗がつくのにそれほど時間は掛からなかった。
男の圧倒的な力でねじ伏せられ仰向けに倒れる涼子。戦闘中に何度も秘部を弄られたせいか、彼女が感じたであろう証拠がスーツに染みついている。

はあ…
はあ…
じゅん!

まさかの敗北…！！

彼女の運命はどうなってしまうのか！？


極上のプロポーションにぴっちりと体に張り付いたボディスーツを身にまとう彼女の名前は「朝霧涼子」31歳。
裏社会では彼女の仕事っぷりを誰もが評価するほどのフリーの凄腕エリートスパイ。もとい殺し屋である。
彼女を欲しがる組織は山ほどあるが従わせようとした組織は全て壊滅させるほどの実力がある。
今回もとある組織を壊滅させるため、そのアジトに乗り込んでいる。


「それなりに警備はしっかりしてるみたいね」
先に進もうとするが2人の男が見張りをしているのを発見する。
「仕方ない。別ルートを探って・・・」
「そこで何をしている！」
一足遅かったようだ。

「ケガをしたくなければ大人しくしろ」
「わ、分かったわ・・・だから撃たないで」
「おいお前ら侵入者だぞ！こっちにこい」
すると男は先ほど警備していた男たちをこちらに集める。
「こいつどうする？」
「とりあえず牢屋に入れとくか？」
「そうだな。その前にボスに報告だ」
彼女にとってここで捕まってしまうのは不都合。
（まずいわね・・・）

「ねぇあなたたち。今ボスに連絡しちゃっていいのかしら？」
「どういう意味だ？」
「男3人に女1人。この状況じゃ私はあなたたちに抵抗することもできないわ。今報告しなければ私を好きに出来ると思うけど・・・」
彼女の言う通り、下っ端である彼らが報告後に彼女の体を好きにすることなど出来ない。男たちは改めて彼女の体を凝視し唾を飲む。
隅々まで舐めまわすように体を眺めそして一瞬で男たちは素っ裸になり、その引き締まったボディに飛び掛かる。

「あん！ちょっとあなたたちがっつきすぎよ」
「うるせぇ！誘ってきたのはお前だろこの変態痴女め！」
「ケツ柔らけぇ！」
「こんな風にされることを望んでたんだじゃねぇーのか？」
男たちは無我夢中に女スパイの体を乱暴に触る。

ヒップの間に顔を完全に密着させ秘部をねちこく
舐められ甘い声が漏れる涼子。
あぁ…
ぺちゃ
ぺちゃ

彼女がなぜ何も抵抗せずにいるのか。それには理由があった。
男は性欲を爆発させたとき警戒心が薄れることを彼女は知っている。
その油断した隙ににターゲットを処理する。これが彼女の得意技、俗にいうハニートラップだ。
「おいおい。段々濡れてきたんじゃねぇか？」
1人の男が馬鹿にした表情で股間をボディスーツの上から乱暴に触る。
（こんな奴らにあまり時間は割いてられないわ。少し強引だけど仕方ない・・・）
もみ。
もみ。
もみ。
もみ。
シゲシゲ
シゲシゲ
シゲシゲ

「あなたがさっき付けたよだれじゃないかしら？女っていうのは乱暴に扱って気持ちよくなるものじゃないの。童貞くんには少し難しい話だったかしら」
笑いながら男を煽り口調で返すと思いのほか効いたのか顔を赤くし立ち上がり股間を涼子の顔に近づける。
「許さねぇ！二度とそんな口がきけねぇようにこいつで塞がねぇとな！」

「んっ～!!」
「おらもっとちゃんと咥えろ！」
男は頭を掴み口からイチモツが離れないように抑える。
「手が空いてるぞ！俺も気持ちよくしてくれよ」
「こいつでかい口叩いてた割に乳首勃ってるじゃねーか」
ジュボ♥
ジュボ♥
ジュボ♥
くり♥
くり♥
くり♥
くり♥

「こいつのバキュームやべぇ！気持ちよすぎる・・・！」
「こっちも手首の使い方とラバー手袋の感触でどうにかなりそうだ！」
男達はすっかり涼子のテクニックの虜である。
「やべ！で、出る・・・！」
「俺も・・・！」
ジュボ♥
ジュボ♥
ジュボ♥
くり♥
くり♥
くり♥
くり♥

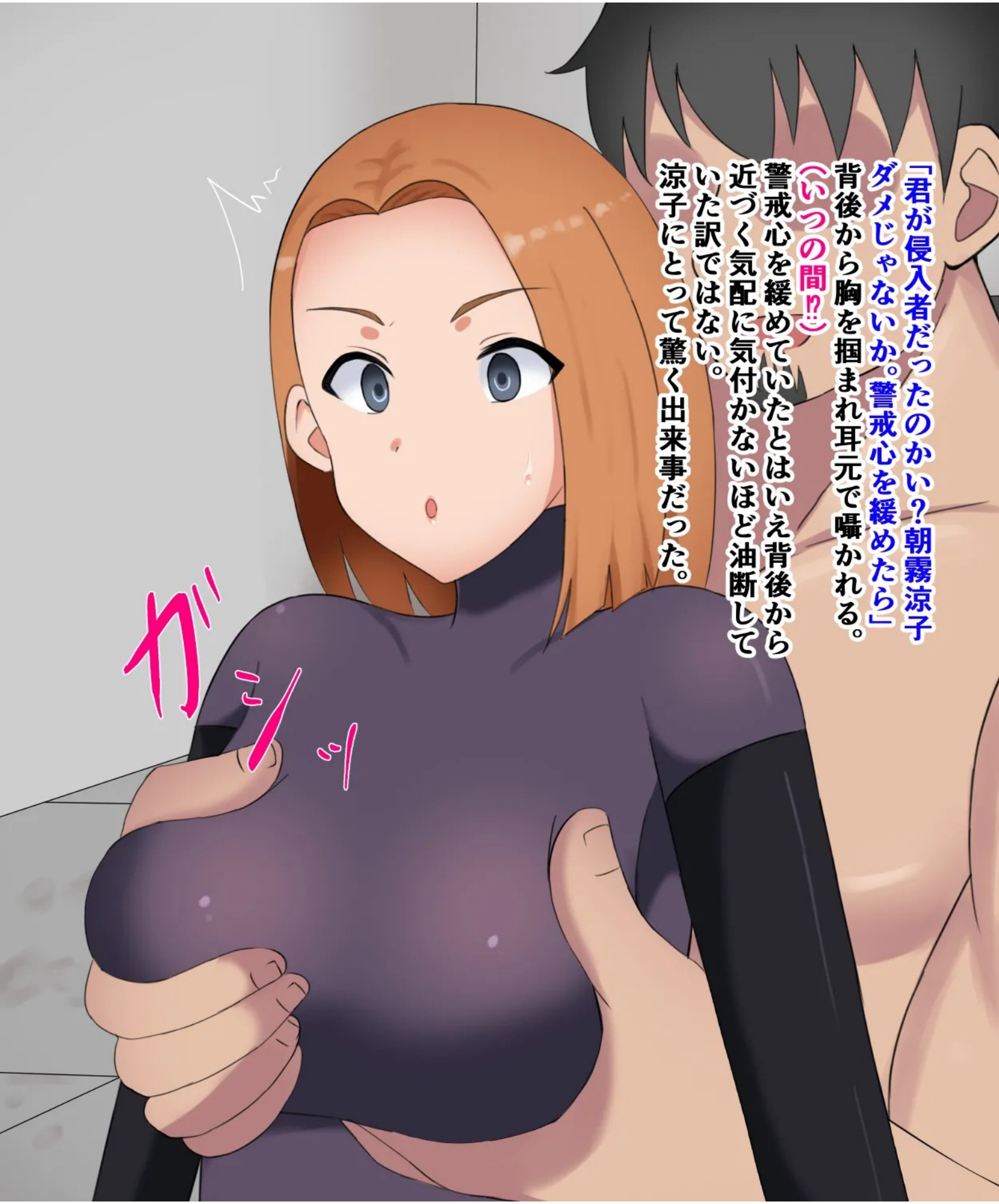
『んん！？』
今まで溜まっていたものがすべて放出されたかのような
すさまじい量のスペルマが口の中に広がり、顔やスーツに
もべっとりと付着する。
びゅるっー
びゅるっー

「気持ちよかったぜ・・・」
「そうだな。こんなこと滅多にないから得した気分だぜ！」
「正直俺もしてもらいたい所だがそろそろ報告しねぇと
地下にいるボスに怒られちまうぜ」

「そうだな、報告しにいこ・・・」
バタッ
「おい何倒れて・・・」
バタッ
「おいお前らなにやって…死んでる!?
まさか・・・!」
「あなたたち油断しすぎよ。さようなら❤」
「うっ・・・」
バタッ

「作戦成功ってところかしら。まさかここまで思い通りになるとはね。
組織のリーダーの居場所も分かったことだしラッキーだわ♪」
涼子のてのひらで踊らされていた男たちであった。

「ここが地下ね」
ここまで難なく地下までたどり着いた涼子。
しかし辺りを見渡すが人の姿がないことに
気付く。
「あらぁもしかして逃げ出したのかしら？
ここで倒しておけば終わりだったのだけれど
残念。また作戦の練り直しね」
敵がいないことに少し安堵し警戒心を緩めた
その時だった。


「君が侵入者だったのかい？朝霧涼子
ダメじゃないか。警戒心を緩めたら」
背後から胸を掴まれ耳元で囁かれる。
（いつの間!?）
警戒心を緩めていたとはいえ背後から
近づく気配に気付かないほど油断して
いた訳ではない。
涼子にとって驚く出来事だった。
ガシッ

「私のことを知っているのかしら」
「もちろんさ。君は裏の世界じゃ有名人だからね」
（おそらくこいつがリーダーね・・・）
「それで？私が気付かない状況を作っておきながら殺さなかった。どういうつもり？」
もみ。
もみ。
もみ。
もみ。

「うーん・・・ただ殺しても勿体無いからな。」
男は涼子の胸の先端を刺激しながら考え事をする。
ん・・・
カリッ
カリッ
カリッ
カリッ
カリッ
カリッ

「そうだ！今から戦闘をして降参した方が勝った方の奴隷。
相手を殺すもよし利用するもよし！面白そうなゲームだろ？」
男は楽し気に話しかける。
くり
くり
くり
くり
くり
くり

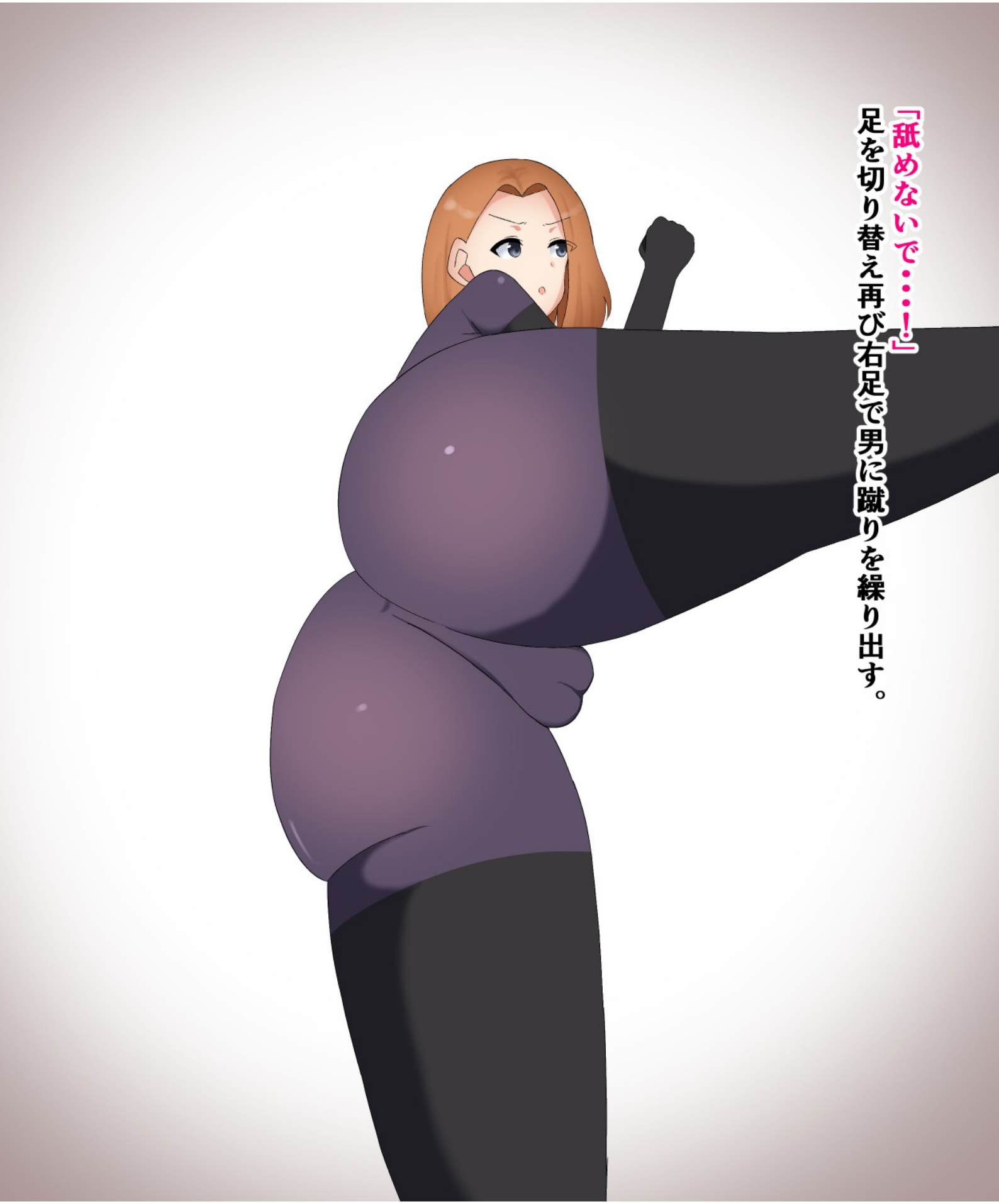
（今のこの有利な状況から振り出しに戻すってこと・・・？
元々殺すつもりだし断る理由はないわ）
あぁ♡
ピンッ♡
ピンッ♡

「いいわ。そのゲーム乗ってあげる。
今私を殺さなかったことを後悔させて
あげるわ！」
「いいねぇ・・・強気な女は大好きだよ」
男が手を脇から離した瞬間、涼子は攻撃
をしかける。

素早く後ろを振り返り男の首元を目掛けて蹴りを繰り出す。
普通ならこれを避けられる者はいない。これで終わるはずだった。

（え・・・？）
男はいつの間にか彼女の背後に立っていたのだ。
「中々速い蹴りだね。だが俺からしたらまだまだ遅いよ」
一瞬の出来事に頭が混乱してしまう涼子。
。

普通の人間ならば致命傷になるはずだが男にとって涼子の攻撃は
まだまだ未熟らしい。
（この男・・・強いわ・・・！）
男は無防備に開かれた股をゆっくりと触る。
「君なら分かったんじゃないか？俺には勝てないって」
相手は強い。しかし涼子も諦める訳にはいかない。
ん♡
すり…♡
すり…♡
すり…♡

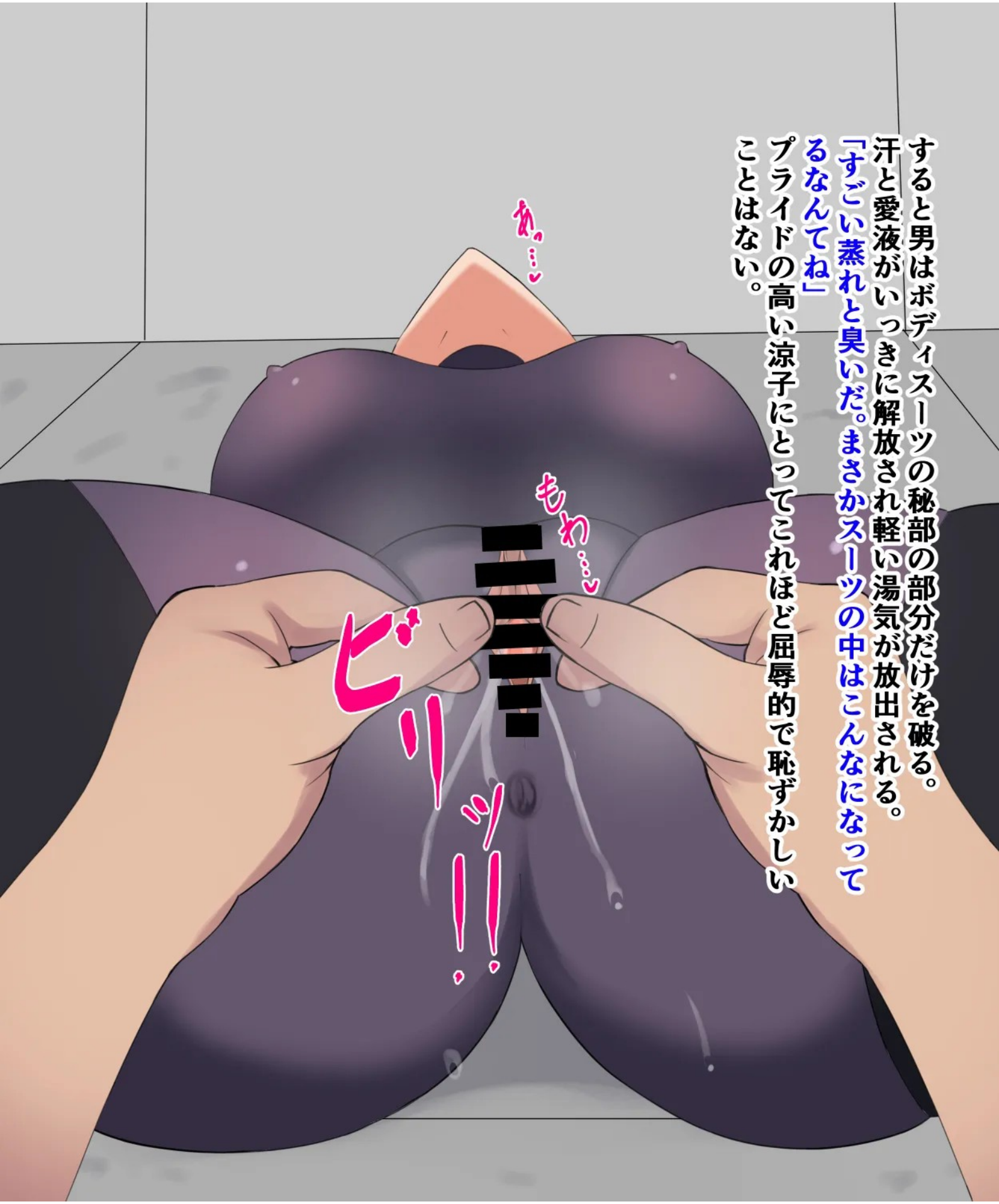

『舐めないで・・・！』
足を切り替え再び右足で男に蹴りを繰り出す。

しかしその攻撃もいとも簡単にかわされてしまう。
（また避けられた!?）
男は再び女スパイの股間を弄り今度はお尻をがっしりと掴む。
「あっ・・・やめ・・・！」
「戦闘で鍛えられた良い尻だねぇ。弾力があって触りご心地がいい」
がしっ！
くちゅ

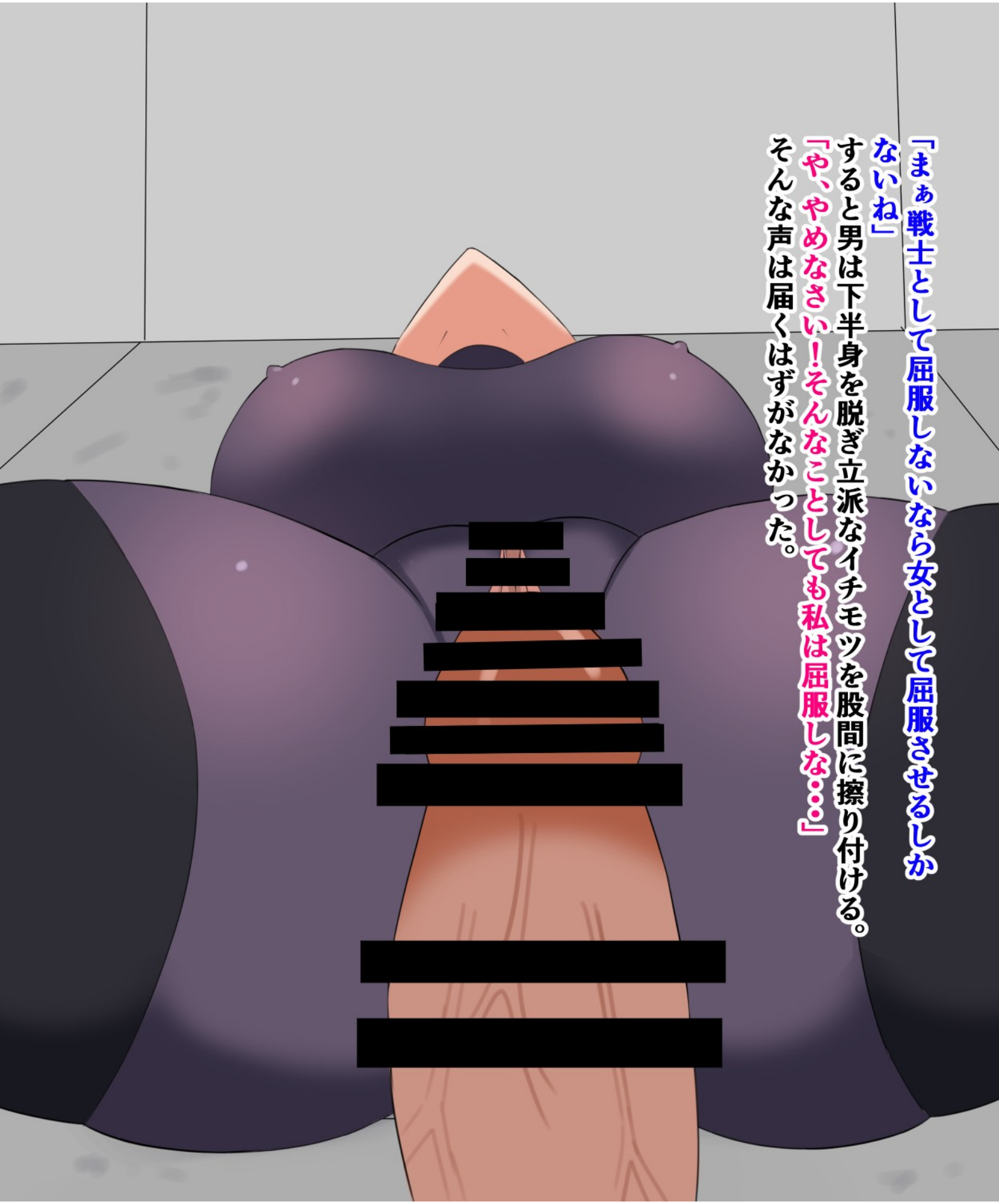
普段の戦闘ではありえない気持ちいいという感情と
悔しいという感情が重なりどうにかなりそうになる
女スパイだがそれでも負けられないプライドがある。
戦闘は続く。

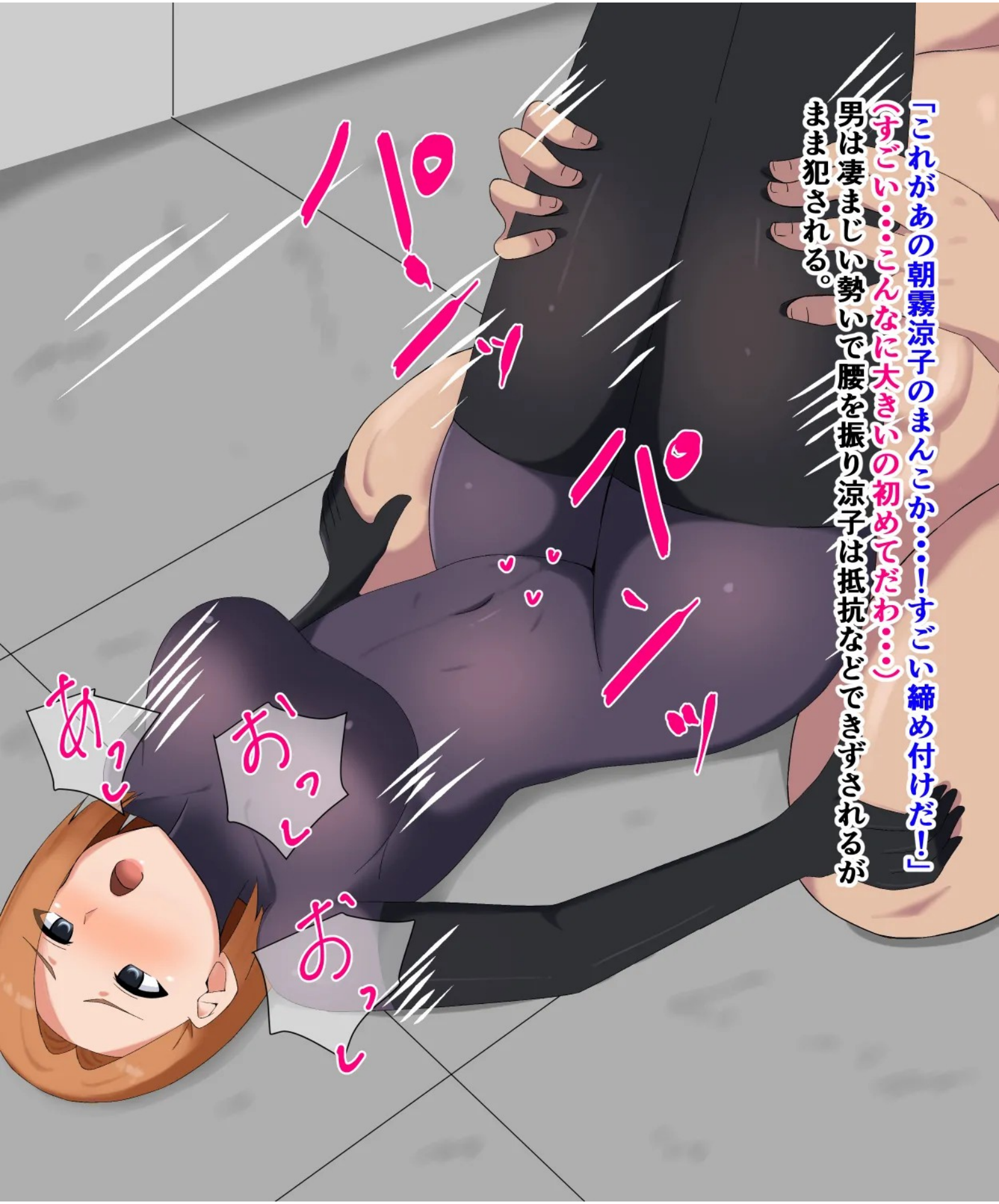
勝敗がつくのにそれほど時間は掛からなかった。
男の圧倒的な力でねじ伏せられ仰向けに倒れる
涼子。戦闘中に何度も秘部を弄られたせいか、
彼女が感じたであろう証拠がスーツに染みついて
いる。

「さぁどうする？降参するかい？」
男は追い打ちをかけるようにスーツの上から秘部を弄る。
（ダメ・・・全く歯が立たないわ・・・でもあきらめる訳には・・・！）
「へぇ・・・まだあきらめないんだ。流石エリートスパイだ」
くちゅ
くちゅ
くちゅ



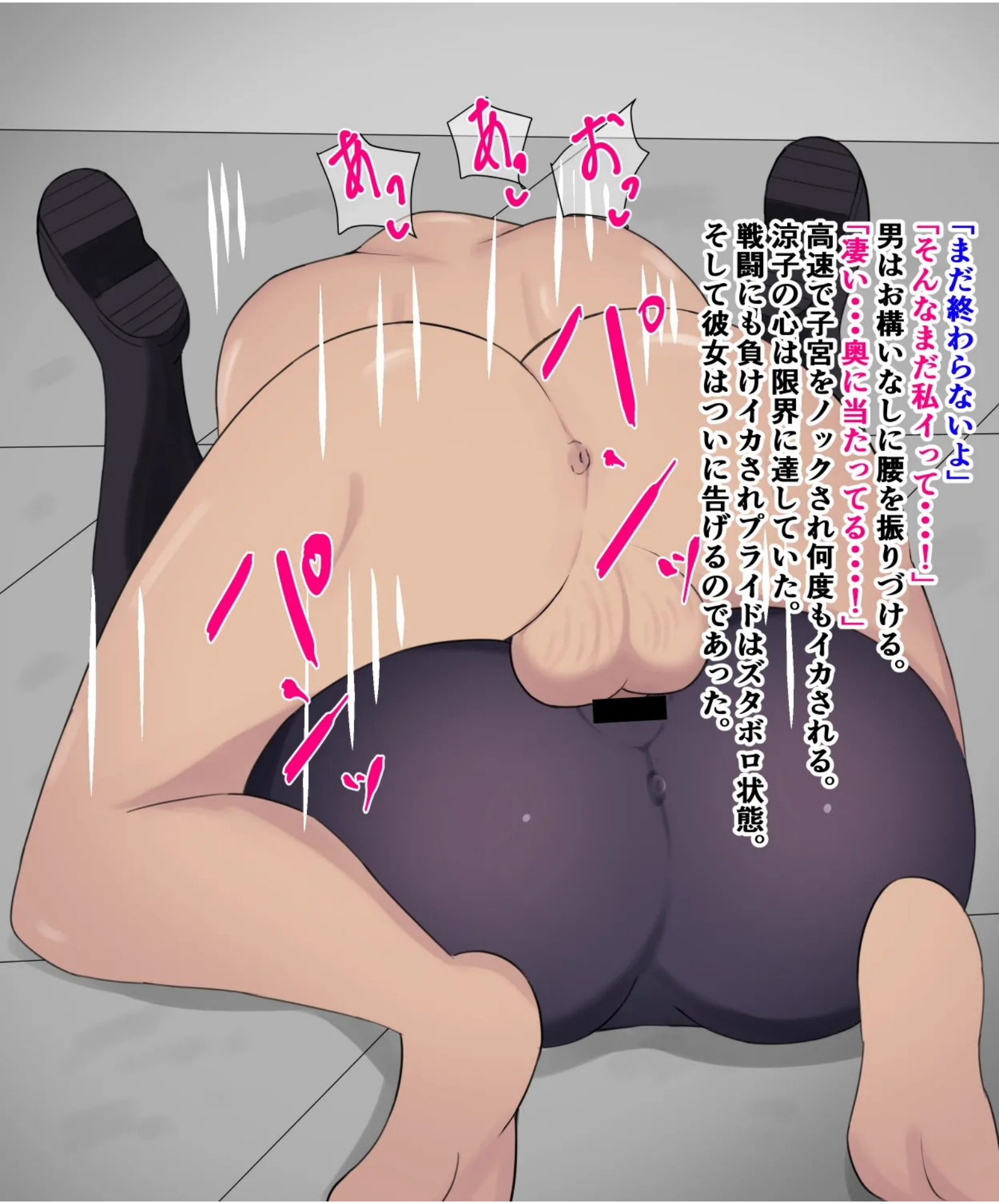
すると男はボディスーツの秘部の部分だけを破る。
汗と愛液がいっきに解放され軽い湯気が放出される。
「すごい蒸れと臭いだ。まさかスーツの中はこんなになってるなんてね」
プライドの高い涼子にとってこれほど屈辱的で恥ずかしいことはない。

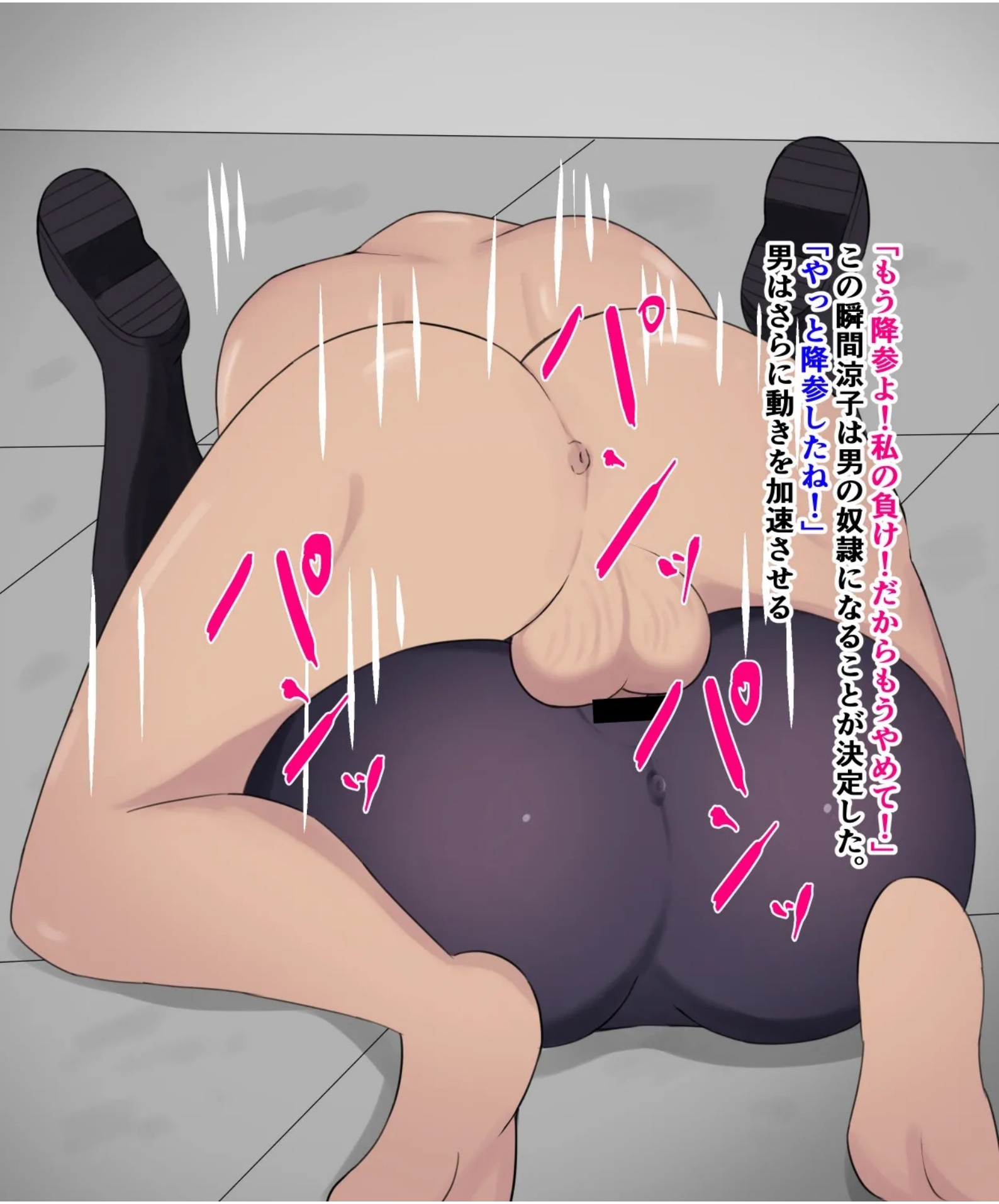

「まぁ戦士として屈服しないなら女として屈服させるしかないね」
すると男は下半身を脱ぎ立派なイチモツを股間に擦り付ける。
「や、やめなさい！そんなことしても私は屈服しな・・・」
そんな声は届くはずがなかった。


「これがあの朝霧涼子のまんこか・・・！すごい締め付けだ！」
（すごい・・・こんなに大きいの初めてだわ・・・）
男は凄まじい勢いで腰を振り涼子は抵抗などできずされるがまま犯される。
パンッ
パンッ
パンッ
あっ
おっ
おっ

「1発目出すぞ！」
「え・・・？嘘！」
パシッ
パシッ

ドプッ
ドプッ
んおお!!
ビクッ♡
ビクッ


「まだ終わらないよ」
「そんなまだ私イって・・・！」
男はお構いなしに腰を振りづける。
「凄い・・・奥に当たってる・・・！」
高速で子宮をノックされ何度もイカされる。
涼子の心は限界に達していた。
戦闘にも負けイカされプライドはズタボロ状態。
そして彼女はついに告げるのであった。
あっ
あ
お
パン
パン


「もう降参よ！私の負け！だからもうやめて！」
この瞬間涼子は男の奴隷になることが決定した。
「やっと降参したね！」
男はさらに動きを加速させる
パンッ
パンッ
パンッ

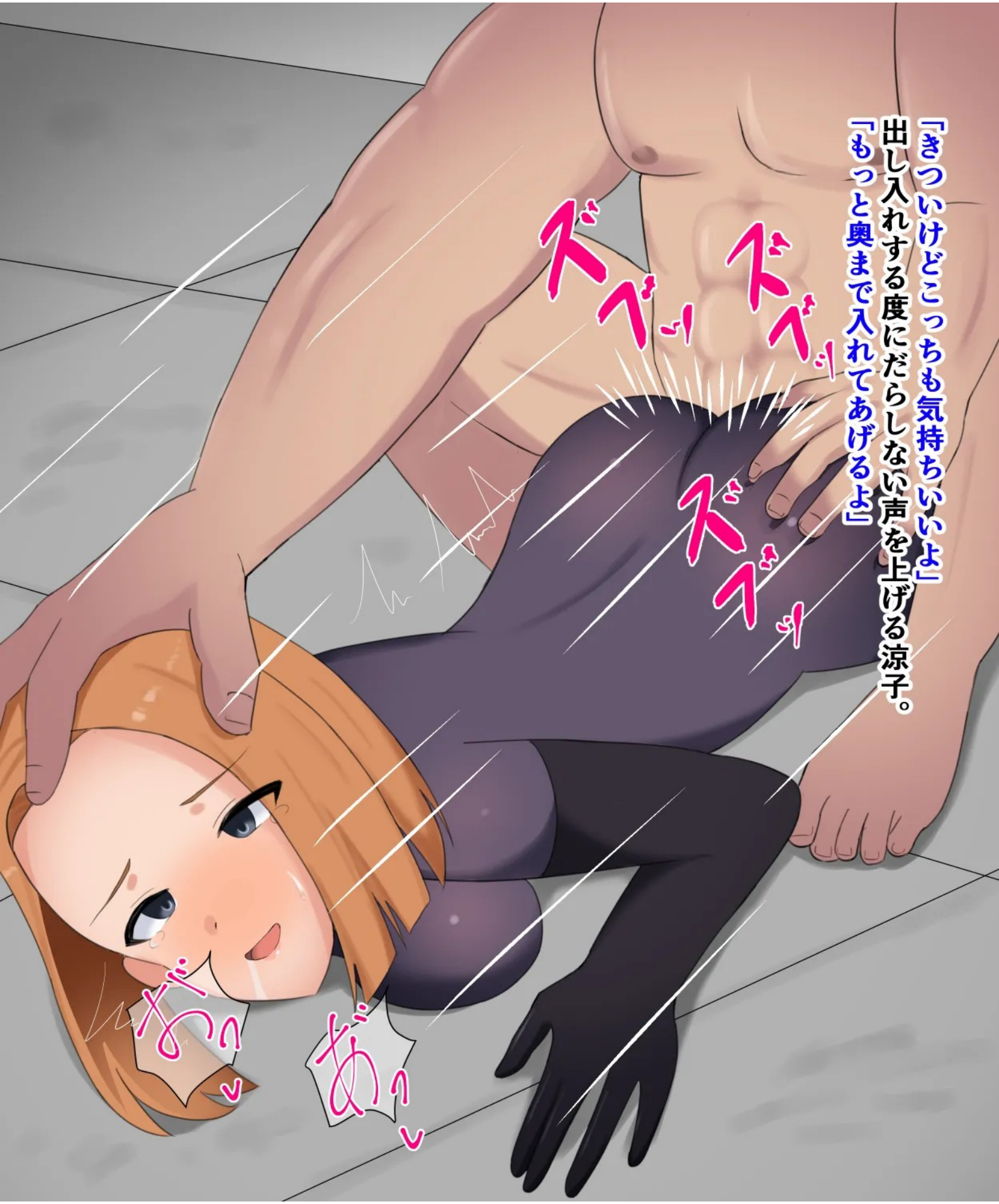
ドブロ
ドブロ

おっ♡
おっ♡
ビクッ♡
ビクッ♡
ビクッ♡
ビクッ♡

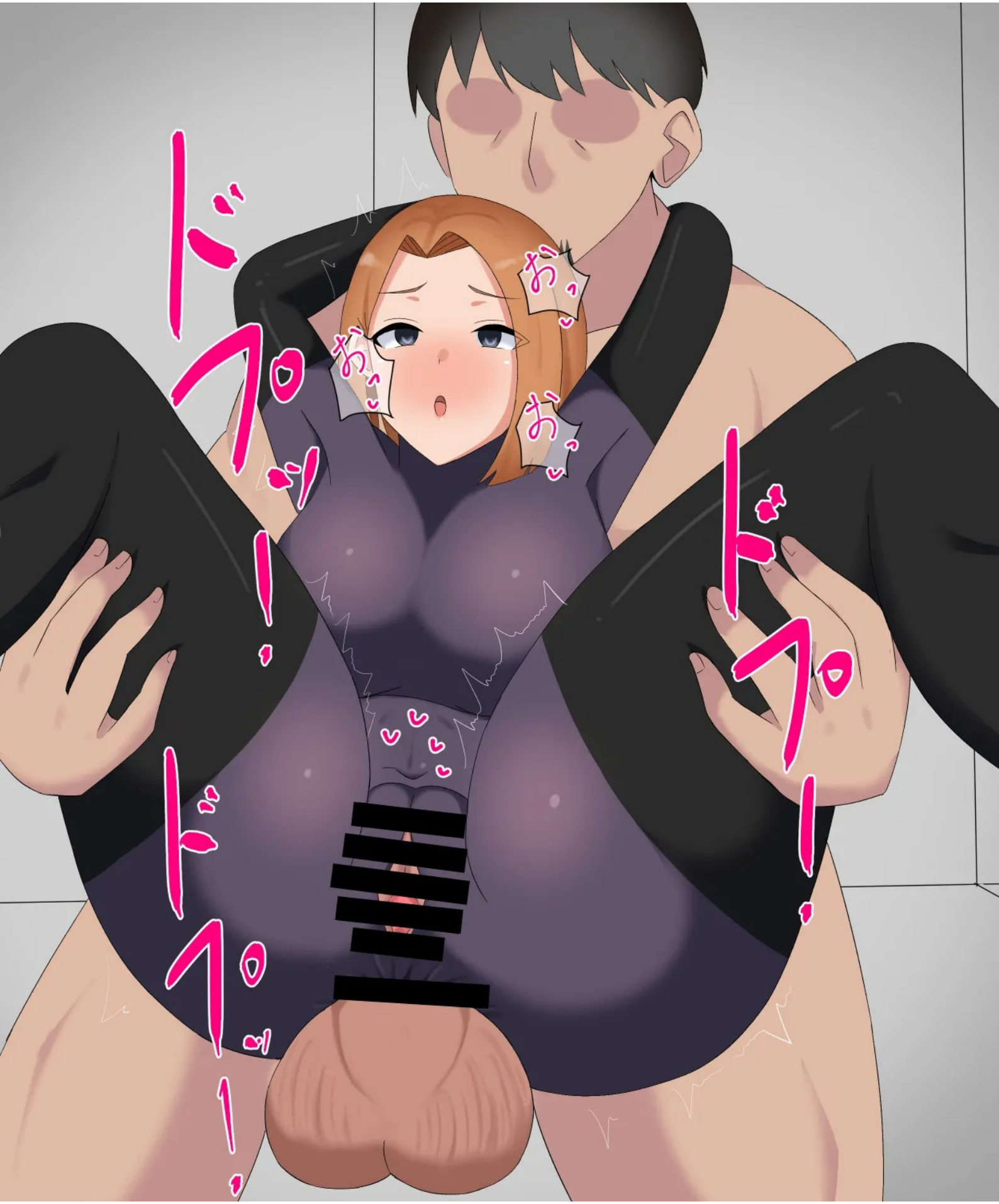
男はまだまだ終わらなかった。
「待って！私はもう降参したはずよ！」
「降参したらやめるなんて誰が言ったんだ？
君は俺の奴隷だ。俺に委ねてればいい」
涼子は絶望する。この男の奴隷になるということは
そういうことなのだ。
ガシッ

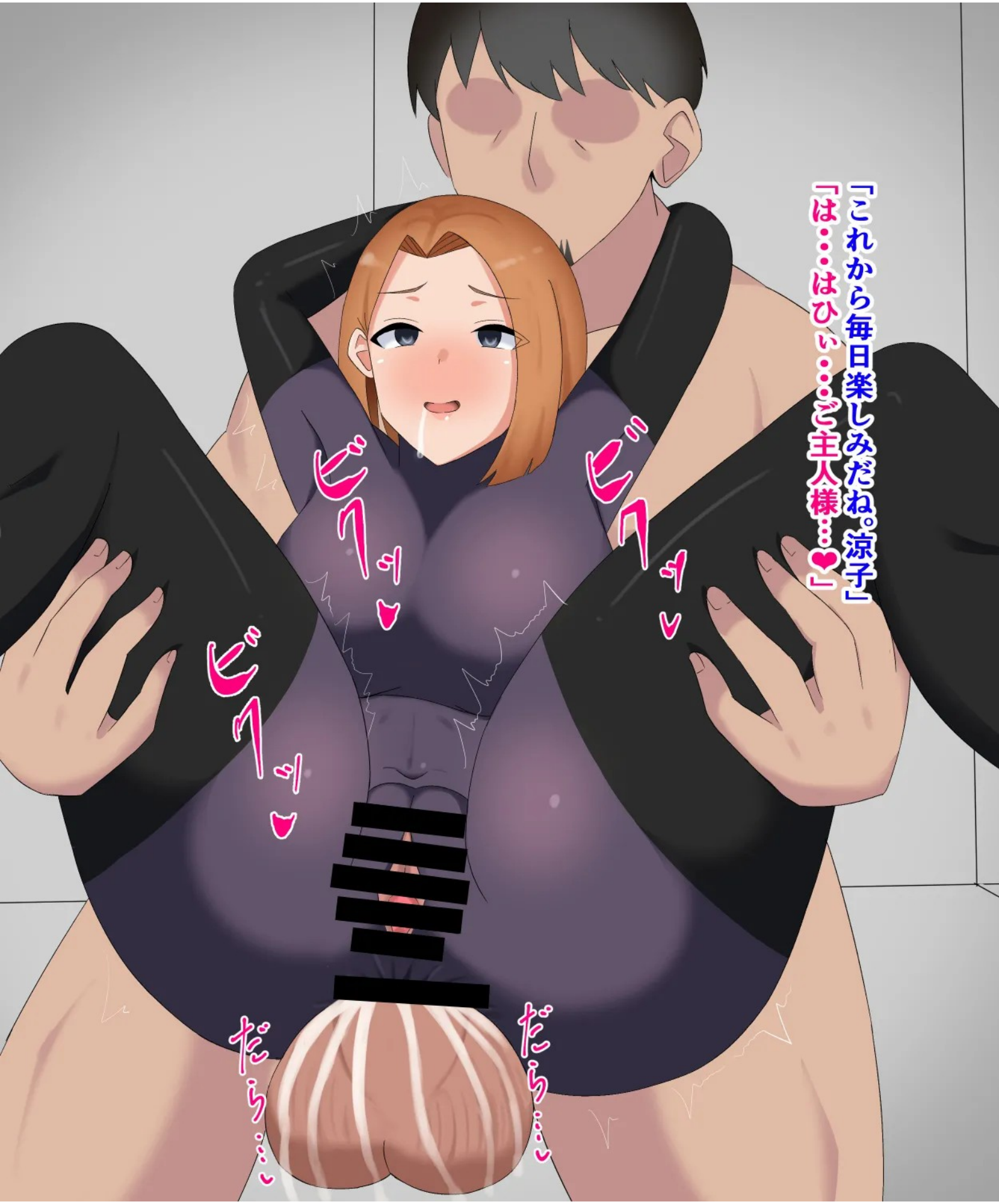
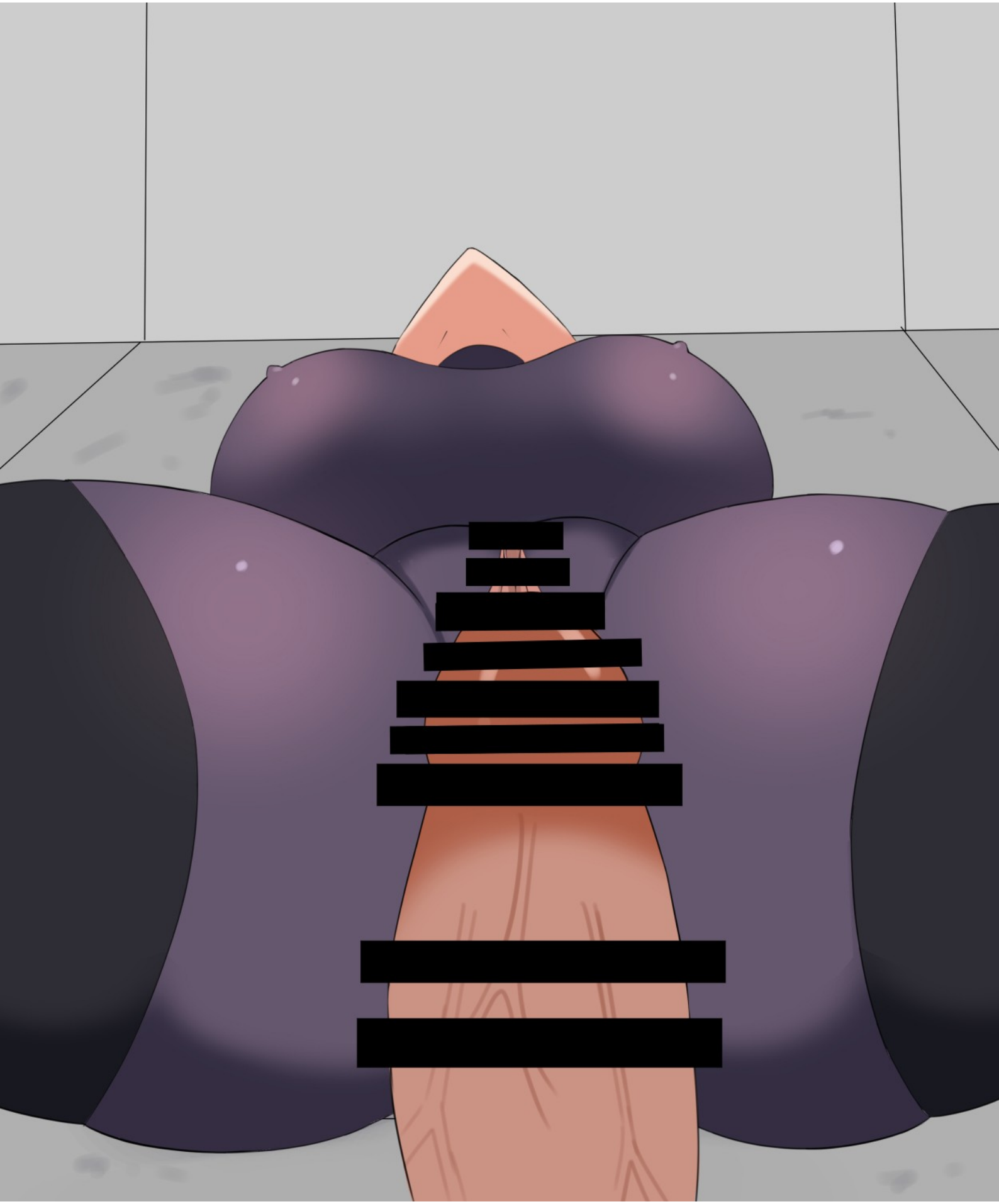
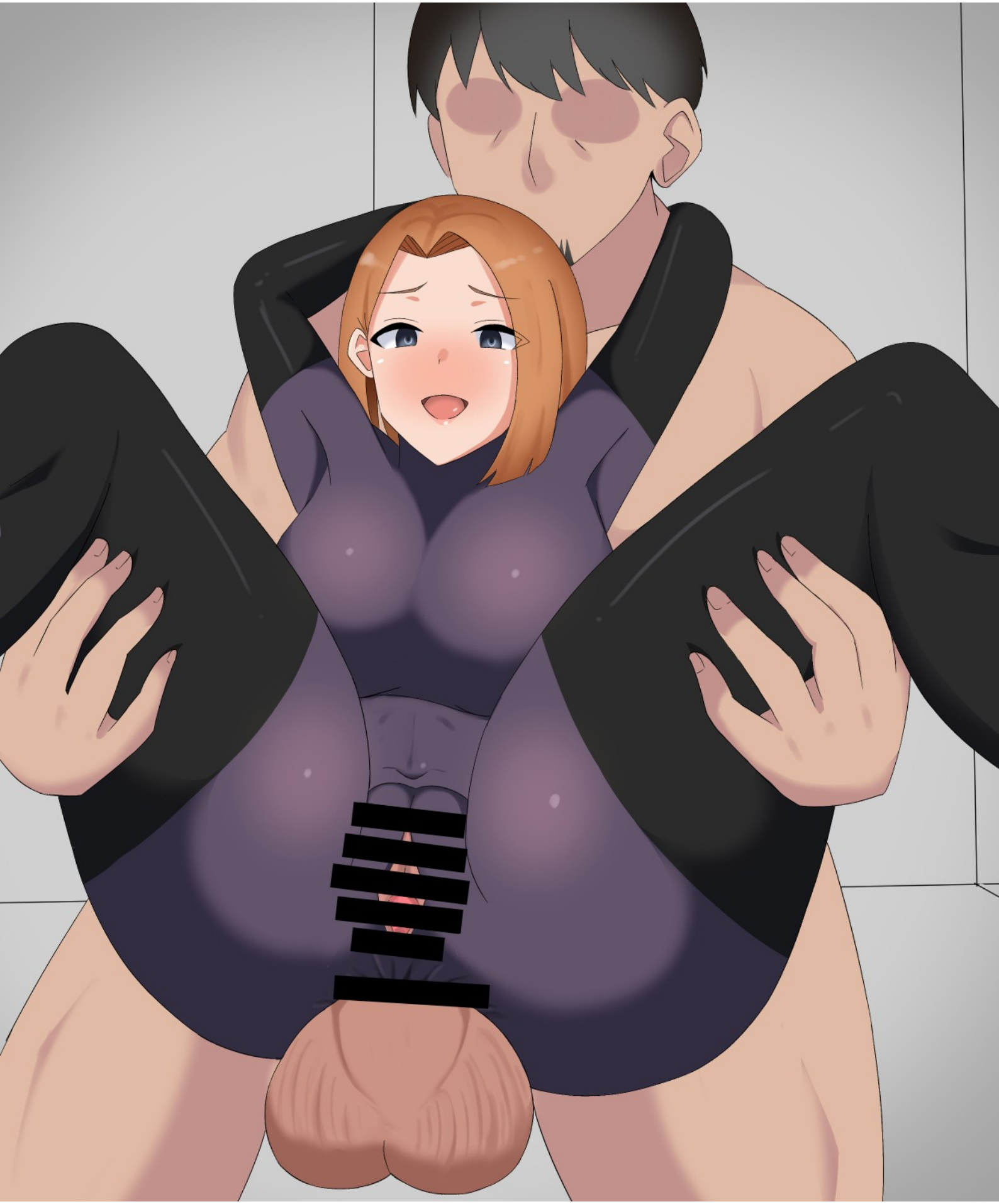
「こっちの穴も味見しておこうかな」
男はスーツごしに見えるすぼみに自分の股間を当てる。
「嘘！やめて！やめて下さい！お願いします！これ以上されたら私・・・！」
男に懇願する姿は少し前の彼女では考えられない光景である。
しかし男はその願いを簡単に踏みにじる。

「んぉおおおおおお♥」
スーツの生地を被ったイチモツが涼子のアナルを貫く。


「きついけどこっちも気持ちいいよ」
出し入れする度にだらしない声を上げる涼子。
「もっと奥まで入れてあげるよ」
ズブッ
ズブッ
ズブッ
ズブッ
あぁ
あぁ

男は涼子を挿入したまま持ち上げる。
「おしりっ！きもちぃ❤アナル奥までえぐれてるぅ～❤」
「俺のちんこの形になるまで調教してあげるからね！」
もうかつてのエリートスパイの姿はそこにはなかった。
あるのはオスのちんこに溺れるメスの姿のみ。


ドプー！
ドプー！
ドプー！
おっ
おっ
おっ


「これから毎日楽しみだね。涼子」
「は…はひぃ…ご主人様…♥」
ビクッ♥
ビクッ♥
ビクッ♥
だら…
だら…

こうして彼女は裏社会から姿を消し、男の奴隷として生きていったのであった。